

## 朗澄について

増山 賢 俊

## 一 はじめに

文泉房朗澄（一一三二～一二〇九）は石山寺中興として、観祐（一一五六～一一六〇）と共に名を連ねる学僧である。石山寺聖教の奥書に多くその名を残し、『石山寺縁起』<sup>①</sup>にもその名が見られる。

朗澄の先行研究は、佐和隆研・田中稔・田中稔・月本雅幸各氏の研究がある。最近では宇都宮啓吾氏<sup>②</sup>により、朗澄書写の奥書に「念仏宗朗澄」とあることが指摘されている。

石山寺聖教は、石山寺文化財総合調査団編『石山寺の研究』として一切経、校倉聖教、深密藏聖教の三つに分けて目録が整理されているが、石山寺所蔵の一切経は、書写奥書に多数その名が見られる「念西」によって発願された事業であり、朗澄も一切経事業に関わっていることが聖教書写奥書から見て取れる。

また、田中氏<sup>③</sup>も指摘されているが、『造塔延命功德経』<sup>④</sup>（般若訳）奥書に「明応第五天以文泉房密宗文庫之本書之 空忍」とあり、明応五（一四九六）年には、「文泉房密宗文庫」が存在した可能性があり、古くから朗澄の残した聖教が大切に扱われてきた。なお、膨大な石山寺聖教は、未だ一部しか翻刻されていない。

本稿では、血脈や書写奥書などから、朗澄の経歴、立場などを明らかにしたい。

## 二 朗澄の受法について

朗澄の経歴に関しては、月本氏が石山寺所蔵の寺誌類を元に詳細にまとめている。この中で、尊賢（二七四九～一八二九）による『石山寺年代記録』三卷・『石山寺座主伝記』一卷・『石山寺僧宝伝』一卷・『石流相承血脉集』一卷を中心に『石文相承』等、他の石山寺聖教類も参照しながら述べている。

本稿では、月本氏の年譜を元に朗澄の受法の記録を中心に抜き出した。『石山寺の研究』、『石山寺年代記録』、『石山寺僧宝伝』以外の資料は著者未見であり、月本氏の記述を元になっている。

・朗澄略年譜（月本氏作成の年譜より、伝受の記述のみを改変・抜粋）

長承元（崇徳天皇） 一一三二年 誕生 俗姓等未詳。

久安六（近衛天皇） 一一五〇年 十九歳 宰相阿闍梨淳観より『神蔵岡金剛界次第』を受ける。

仁平四 一一五四年 二三歳 金剛峯寺にて浄厳房阿闍梨（実禅）より『大毘盧舍那経供養法疏』卷下を受ける。

久寿二（後白河天皇） 一一五五年 二四歳 高野山丈六堂別所にて浄厳房実禅より小野流印可を受ける。

永暦元（二条天皇） 一一六〇年 二九歳 初めて内山真乗房亮慧より『諸尊法』を受ける。

大法房実任より受法する。

『護摩儀軌』二卷を受ける（師は実任か？）。

永暦二／応保元 一一六一年 三十歳 『延命院胎蔵次第』を受ける（師は実任か？）。

『遺告』を受ける（師は実任か？）。

『不動大谷次第』を受ける（師は実任か？）。

『孔雀経法次第』を受ける。

## 朗澄について (増山)

|                                         |           |       |     |
|-----------------------------------------|-----------|-------|-----|
| 勸修寺西明院にて実任より勸修寺流伝法灌頂を受ける。               |           |       |     |
| 醍醐寺柏森にて内山真乘房亮慧より(内山の許可)を受ける。            |           |       |     |
| 栗田口十禅師拝殿にて『阿闍梨大曼荼羅灌頂儀軌』一軸(高野山宝寿院蔵)を受ける。 |           |       |     |
| 阿闍梨行海の勸修寺別当雅室に対する伝法灌頂に神供を勤める。           |           |       |     |
| 実任より小嶋流を受ける。                            |           |       |     |
| 栗田口にて『破地獄儀軌』三卷、小嶋流秘密灌頂印契を受ける。           | 応保二       | 一一六二年 | 三一歳 |
| 亮恵より内山流の灌頂を受ける。                         |           |       |     |
| 醍醐寺蓮藏院にて亮恵より内山流の秘密灌頂を受ける。               | 応保三／長寛元   | 一一六三年 | 三二歳 |
| 栗田口にて『十八道次第』を受ける。                       | 仁安二(六条天皇) | 一一六七年 | 三六歳 |
| 栗田口にて大法房実任より『略出念誦經』卷第四を受ける。             | 仁安三(高倉天皇) | 一一六八年 | 三七歳 |
| 十禅師源運(金剛王院流)より伝法灌頂を受ける。                 | 嘉応元       | 一一六九年 | 三八歳 |
| 石山寺にて『大勝金剛五瑜伽法』を受ける。                    | 承安元       | 一一七一年 | 四〇歳 |
| 石山寺にて観祐より芳源流(石山流)の許可を受ける。               | 承安二       | 一一七二年 | 四一歳 |
| 内山大房にて伝法灌頂作法を受ける(胎藏界に二本あり)。             |           |       |     |
| 蓮花王院僧房にて侍従僧都(行海?)より『金剛界法』を受ける。          | 承安五／安元元   | 一一七五年 | 四四歳 |
| 石山寺座主公祐、寛叡の死缺替に朗龍大法師を阿闍梨に補せられんことを請う。    | 治承二       | 一一七八年 | 四七歳 |
| 阿闍梨勝賢の寛照に対する伝法灌頂に色衆を勤める。                | 治承三       | 一一七九年 | 四八歳 |
| 内山永久寺より石山寺へ帰る。                          |           |       |     |
| 石山寺東院房にて『金剛頂經』第二・三を某に伝授する。              | 治承四(安徳天皇) | 一一八〇年 | 四九歳 |

文治三(後鳥羽天皇)一一八七年 五六歳 阿闍梨石山寺座主公祐の範賢に対する伝法灌頂に景雅と共に出仕し教授を勤める(文治二年の説もあり)。

建久六 一一九五年 六四歳 内山の口伝を受け、『私記』五卷を作る。

建久八 一一九七年 六六歳 石山寺東院房にて覚澄等に『大日経供養法』を伝授する。

建久九(土御門天皇)一一九八年 六七歳 石山寺東院房にて阿闍梨伝燈大法師某に『秘藏宝鑰』卷上を伝授する。

建久十/正治元 一一九九年 六八歳 『大日経』七卷を座主阿闍梨(範賢)、観基に伝授する。

承元三 一二〇九年 七八歳 遷化。

これによれば、朗澄は長承元(一二三二年)に生まれ、宰相阿闍梨淳観(寛(一一一九―一一五〇)、浄厳房阿闍梨実禅(二〇九〇―一二六九)、内山真乗房亮慧(二〇九八―一一八六)、大法房実任(二〇九七―一二六九)、撰津僧都源運(一一二二―一一八〇)、観祐(一一五六―一二六〇)、侍従僧都行海(一一〇八前後―一一八〇)等に受法し、石山座主公祐(一二三四―一九六)、醍醐寺座主覚洞院勝賢(一二三八―一九六)とも関係している。活動場所は、金剛峯寺(高野山大伝法院方)から勧修寺に、その後、醍醐寺・東大寺東南院別所栗田口禅林寺へと活動範囲を広げ、やがて石山寺に止住したようである。月本氏も述べているが、僧官位が権律師(または律師)までであることから、出自はそれほど高くないと考えられ、幼少期の記録は不明である。『石山寺聖教目録』の中で文泉房郎澄・郎寵・<sup>⑮</sup> *び*(*o*)・*さ*(*ou*)・文師と記されている。

朗澄が数多くの人物から教えを受けたことは、多くの文献から読み取れる。具体的に挙げると、淳観からは、『石山寺年代記録』久安六(一一五〇)年の条に<sup>⑮</sup>

三月十三日律師文泉房朗澄、宰相阿闍梨淳観に随て、神蔵岡金剛界の次第を受く。  
とあり、一一五〇年頃は淳観に教えを受けていたとされる。

次に浄厳房阿闍梨実禅から伝受を受けたことが、『大毘盧舍那経供養法疏』卷下の奥書に「久寿元季十一月九日、勧<sup>⑯</sup>

## 朗澄について (増山)

修寺に於て書寫し了んぬ。仁平四季六月廿六日、金剛峯寺に於て他本を以て浄嚴房阿闍梨御房より受け奉る。桑門朗寵」とあることから分かる。小野流印可も伝受されている。

内山真乗房亮慧からは、『石山寺年代記録』巻上の永暦元年の条に「六月廿日朗澄初めて内山真乗房阿闍梨亮慧に依付して、諸尊の法を受く。首尾廿年の間、随分の受法『石文抄』<sup>17)</sup>に有り、其の口伝を記さる。時に年廿九。」とあり、亮慧から長期間にわたり教授を受け、その内容は『石文抄』<sup>18)</sup>に記したとされる。月本氏の年表からは、永暦二年に、醍醐寺柏森にて内山真乗房亮慧より内山の許可を受け、『石文相承血脉』、応保二年にも亮慧より内山の灌頂を受けている(『石文相承』)。長寛元年にも、醍醐寺蓮藏院にて亮慧より内山秘密灌頂を受ける、とされる(『石文相承』)。承安二(一一七二)年にも内山大房において灌頂次第を伝受された事が石山校倉所蔵の「胎藏界伝法灌頂作法」「三昧耶戒式」「胎藏界伝法灌頂作法」「金剛界伝法灌頂作法」合一巻の奥書にある。<sup>19)</sup>誰から受法したかは示されていないが、亮慧の可能性が高い。

『血脉類集記』<sup>20)</sup>では亮慧の付法に「朗朝 文泉房。重受」とあり、「朝」字の注に、「澄」とあつて、朗澄のことである。また、『血脉類集記』<sup>21)</sup>の勸修寺法務寛信(一〇八四―一一五三)の付法の後に、勸修寺四天王の一人として、「文泉房朗澄/亮恵弟子」と記されている。

『野沢血脉集』<sup>22)</sup>では、勝覚(一〇五七―一二二九)の付法に勝覚――聖賢――亮恵――朗澄とあり、亮恵の弟子とある。また、『続伝灯広録』<sup>23)</sup>「和州内山阿闍梨亮慧伝」の中に付法五人の一人として、「朗澄。字は文泉。石山に住す。」とある。『野沢大血脉』<sup>24)</sup>には

源運――亮恵〔内山真乗房阿闍梨。付法五人〕――慈信 中納言為通息  
朗澄 石山文泉房

となっている(以後、引用の中、「」は割書。改行(割書の改行も含む)は／にて示す)。

『野沢血脉集』<sup>25)</sup>の醍醐寺座主覚洞院勝賢(一二三八―一二九六)の付法の弟子にも「郎澄」の名が見られ、その傍注に「文

泉房律師」とあり、その下に割書きで、「石山。文泉房。勝賢僧正に入壇受法す。『実帰鈔』に見えたり。又聖賢の弟子、亮恵の受法也」と、記されている。

『密宗血脈鈔』<sup>(26)</sup>にも

亮恵——慈信「中納言為通息」

朗澄「石山文泉房。畏私に云く。『実帰鈔』に／勝賢にも僧正入壇受法と見たり。」

と、同様に名前が見られる。『四巻鈔』中巻の「聖観音軌最秘」の血脈に「朗澄律師亮恵闍梨に受く。長寛元年十二月二十六日口伝云々。」とあり、

範俊——嚴覚——寛信——淳寛——亮慧——朗澄——成宝——栄然——（以下略）

と記されている。

次に大法房実任からの受法は、『石山寺年代記録』の永暦元年の条に「八月十九日大法房実任参り、受法せる。十一月廿二日同じく『護摩儀軌』二巻を受く。」とあり、亮慧と同じ時期に実任とも接触していたことが分かる。続く応保元年（永暦二年）の条にも「正月六日同じく『延命院胎藏次第』を受く、同九月『遺告』を受く、同十九日『不動大谷次第』を受く、三月廿九日勸修寺西明院道場に於て、伝法灌頂を受くる。阿闍梨大法房実任「六十四」受者朗澄「三十七」、十二月十日同所に於て、『小嶋印可』を受く。」とあることから、引き続き実任より受法したと考えられる。永暦二年に伝受されたと考えられる『孔雀経法次第』の奥書には<sup>(30)</sup>

保元二年正月八日勸修寺に於て書寫了んぬ。／「永暦二年正月廿八日伝受奉け了んぬ。」／求法沙門朗寵<sup>(追筆)</sup>

とあることから、師は特定できないが、勸修寺であるとすれば実任ではないか。又、永暦二年には禅林寺にて『阿闍梨大曼荼羅灌頂儀軌』一軸を伝受されている。伝授者は記載されていないが、『石山寺年代記録』の仁安二年の条に<sup>(31)</sup>「七月十四日栗田口に於て『十八道次第』を受く。」とあり、仁安三年の条にも<sup>(32)</sup>「七月廿四日栗田口に於て『要略念誦経』四巻を大法房に受け了る。〔師年七十二、<sup>(33)</sup>朗澄〕三十七。」とあることから、実任から受法したのではないか。

## 朗澄について（増山）

また、『血脈類集記』<sup>(33)</sup>の実任の付法の弟子に「朗澄」の名がある。また、『野沢血脈集』<sup>(34)</sup>にも、勸修寺大僧都嚴覚（一〇五六―一二二二）の付法の弟子に

嚴覚——良勝「蓮花房阿闍梨」——実任「大法房上人」——朗澄「文泉房律師」

と記されている。『伝灯広録』<sup>(35)</sup>の「勸修寺大法房阿闍梨学講実任伝」にも、付法の弟子に「朗澄」の名が出てくる。『真言附法本朝血脈』<sup>(36)</sup>の実任の付法には、「朗澄」律師。文泉房」とあり、醍醐寺蔵本『伝法灌頂師資相承血脈』<sup>(37)</sup>にも「実任——朗澄（律師 文泉房）」と記されている。『四卷鈔』中巻の『文泉房相伝事』<sup>(38)</sup>には「*ヲ* (gar) 抄（『儼避羅抄』十四裏に云く、文泉房「朗澄」大法房に受く、口伝に云く、仁安四年「歳次／己丑」三月十四日「庚／午」粟田口に参上す。（以下略）」と、実任が入滅するまで交流があったことが分かる。

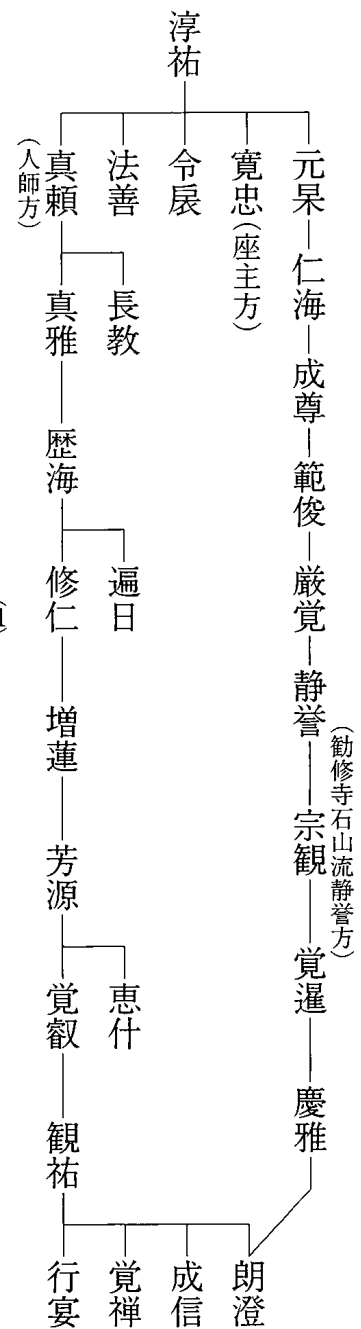
次に撰津僧都源運からの受法は、「嘉応元（一二六九）年に十禅師源運より伝法灌頂を受ける」という記述が『石文相承』にあるが、『血脈類集記』や『野沢血脈集』等では、朗澄との繋がりは見られない。この時代で該当すると考えられる僧は撰津僧都源運であり、源運は亮慧と同じく三密房阿闍梨聖賢（一〇八三―一一四七）に受法を受けた醍醐寺金剛王院流の学僧である。仁安四（一二六九）年は実任が入滅した年であり、朗澄にとって転機となった年と思われる。

観祐からの受法については、『石文相承』に「承安二（一一七二）年、石山寺にて観祐より芳源流（石山流）の許可を受ける」とあるが、源運と同様、『血脈類集記』や『野沢血脈集』では、朗澄との繋がりは見られない。『四卷鈔』中巻の血脈に

淳祐——真頼——雅真——曆海——修仁——増蓮——芳源——覚叡——観祐——朗澄——成宝——（以下略）

の血脈が見られる。

また、『石流相承血脈』<sup>(40)</sup>による朗澄の法流にも観祐の名が見られる。



また、醍醐寺蔵本『伝法灌頂師資相承血脈』<sup>(41)</sup>に、「嚴覺—寛信—念範—観祐」とある。仁和寺華嚴院景雅(一一〇三—一八七—一一八九?)も寛信—中川上人実範(一一四四)—景雅と繋がる法脈を受法しており、景雅の血脈の中には実範からの相承も含まれる。

また、朗澄は亮慧を経ないで、淳観から『神楽岡金剛界次第』を受法している。このことは、朗澄が勧修寺流の相承を受けていることを示す。そういった中で見るならば、朗澄の観祐からの相承は、石山流人師方の相承だけでなく、念範方、あるいは寛信から行海を経由した勧修寺流を相承したことがわかる。観祐については、中野玄三氏により事績が紹介されており、勧修寺、石山寺を中心に活躍したことが見て取れる。中野氏や浜田隆氏によれば、観祐は勧修寺流念範(二〇八八―一一三二)の法灯を受け継ぎ、小野流の法流、図像の研究を行い、台密系図像にも接した人物であるという。

朗澄の著作を見ると、『大悲胎藏三昧耶曼荼羅図』・『金剛界三昧耶曼荼羅図』・『両界曼陀羅図』・『蘇悉地手契図』等の図像を残している。また、『瑜伽三摩地』・『金剛三密鈔』・『三广(摩)耶戒要事』・『毘盧遮那経義釈』・『決集』・『行林抄』等、台密関連の聖教の書写・校合を行っていることから、観祐の影響が伺える。

次に、石山寺聖教目録の『𑖀𑖄𑖅𑖅𑖅𑖅𑖅 (va jra dha tu dha rma・金剛界法)』一巻の奥書に「承安五年四月六日蓮花王院僧房に於て侍從僧都御房より奉受し了んぬ。𑖀𑖄𑖅𑖅𑖅𑖅𑖅」とあり、承安五(一一七五)年に蓮花王院僧房に於て、侍從僧都か



## 朗澄について (増山)

ら金剛界法を授けられたとあるが、この侍従僧都とは行海(一一〇八前後～一一八〇)と考えられる。行海は権大僧都寛信の付法の弟子であり、『血脈類集記』<sup>(46)</sup>の寛信の記事の後に勸修寺四天王の一人として名前が見られ、勸修寺を代表する達者としての評価があった。

また、『血脈類集記』<sup>(46)</sup>の三寶院大僧正定海(一〇七四～一一四九)の付法の弟子として名前が見られ、「行海 侍従律師 修理権大夫行宗子」と、侍従律師と呼ばれていた。『血脈類集記』<sup>(47)</sup>の行海の付法には、「承安二年正月十三日大僧都。同二月二十二日二長者に加わる。治承四年十二月十八日卒。『七十三』」とあることから、承安二(一一七二)年に大僧都となり、朗澄が受法を受けた一一七五年には侍従僧都と名乗っていたことに矛盾は無く、行海である可能性が高い。『伝灯広録』の行海伝<sup>(48)</sup>には、朗澄が勸修寺四天王の一人であったと記されている。生年については、同じ『血脈類集記』でも、寛信の付法に記された行海の記事には、「治承四年十一月十九日卒。七十四」となっており、『野沢血脈集』<sup>(50)</sup>においては、「治承四年十二月十三日入滅七十一」とある。そのため、生年については確実ではない。

石山寺座主公祐は、朗澄を座主に推薦したことが、『石山寺年代記録』<sup>(51)</sup>の治承二(一一七八)年の条に「九月座主権少僧都公祐、朗澄を奏聞せるの挙状、其の状全く観祐の挙状の如く、阿闍梨寛叡の死闕替也、朗澄、時に伝燈大法師位。」と見られる。また文治三(一一八七)年には、公祐が中納言僧都範賢(一一六三～一二〇四)に灌頂を授けるにあたり、仁和寺華嚴院景雅<sup>(52)</sup>と共に職衆として出仕している。このような灌頂への出仕は、勝賢が寛昭(一一三六～一一七九)に伝法灌頂を授けた『三寶院伝法灌頂私記』<sup>(53)</sup>にも記録されている。

『石山年代記録』、文治三(一一八七)年の条に「文治三年三月五日座主公祐僧都当寺に於て灌頂行われる、慶雅〔護摩〕長宗〔誦経〕 朗澄〔教授〕 実然 元雅 聖雅(以下略)」とあり、教授を担当していたことが分かる。職衆で最年長と考えられる景雅(慶雅)は護摩導師を勤めている。

景雅との関係については、『血脈類集記』<sup>(55)</sup>の中川上人実範の付法において「実範―慶雅〔浄慶房/阿闍梨〕―朗澄―親厳」とある。なお『血脈類集記』には「朗澄」と記されているが、石山寺聖教目録の書写奥書や他の記録では、多くは「朗

澄」とある。このことから、田中氏<sup>56</sup>も指摘されるように「澄」は「澄」の誤記であろう。

『諸流灌頂秘藏鈔』『石山流／印信』<sup>57</sup>には

範俊—嚴覺—靜譽—宗親—覺暹—慶雅—朗澄—顯良—（以下略）

とあり、『密教大辞典』の「勸修寺石山流靜譽方」血脈にも同様に

範俊—嚴覺—靜譽—宗親—覺暹—慶雅—朗澄—顯良—（以下略）

とある。景雅の写本・伝領本の多くが石山寺に伝来しているのは、田中氏<sup>58</sup>によれば、朗澄が師である景雅から勸修寺において受け継ぎ、諸本を石山寺にもたらしたものとしているが、景雅自身が石山寺に出入りしていたことから、直接持参した典籍も少なくないであろう。

年譜には無いが、仁和寺僧である随心院大僧正親嚴（一一五一—一二三六）は、『血脈鈔・野』<sup>59</sup>の中で、随心院流事の中の「門跡相承次第」に記された「親嚴僧正受法師匠事」に「朗澄〔文泉房律師／実任流〕と朗澄の名が見られる。

さらに、醍醐寺蔵本『伝法灌頂師資相承血脈』<sup>60</sup>の随心院流においても

阿闍梨増俊—権小僧都顯嚴—親嚴〔号唐橋前大僧正飛彈守中原親光—寺務〕

の箇所に（朱注）で「養和元—十一—廿二—乙丑法住寺房年卅一色八口」とあり、さらに注として、「初兵部アサリ〔无作法〕次大輔僧都〔儀式〕次文泉房律師〔无作法〕次近江僧都〔无作法〕理法房已講并実嚴律師只練学許也不及入壇云々」とあり、親嚴の付法であることがわかる。

以上から、朗澄は、淳観、実禅、亮慧、実任、源運、観祐、行海、勝賢、公祐、景雅、親嚴から相承を受け、勝覚から繋がる醍醐寺系の受法と淳観、亮慧、実任、景雅から勸修寺系の法脈を受法し、観祐等から石山寺に係する法脈を受け継いでいる。月本氏<sup>61</sup>の論文に詳しいが、この中で、石山寺誌類文書の『石流相承血脈集』<sup>62</sup>に「朗澄」は、「観祐の資」と記され、さらに「勸流相承血脈」では、「景雅（慶雅）、実任、淳観、尊海」、「醍醐方相承血脈」では「亮慧、勝賢」、「石山寺僧宝伝」<sup>63</sup>では、「景雅（慶雅）、実位（実任）、淳観、尊海、亮慧、勝賢」という師がいたと述べている。

### 三 朗澄の立場について

次に朗澄の師の事跡と朗澄の書写・校合本を「石山寺聖教目録」から分析することで、朗澄がいかなる僧であったのか明らかにしたい。以下に朗澄の師について述べていく。掲載は朗澄が教えを受けた順序である。

#### 1. 宰相阿闍梨淳観(一一一九～一二五〇)

淳寛とも表記され、『血脈類集記』<sup>64</sup>金剛王院聖賢(一〇八三～一一四七)の付法の弟子に名前が見られ、金剛王院流を相承している。『血脈類集記』<sup>65</sup>、『野沢血脈集』<sup>66</sup>によれば理性院賢覚(一〇八〇～一一五六)からの付法が見られる。『野沢血脈集』<sup>67</sup>、『諸流灌頂秘蔵鈔』<sup>68</sup>等から見れば、安祥寺宗意(一〇七四～一一四八)からも受法している。また、『四巻鈔』<sup>69</sup>によれば、寛信(一〇八四～一一五三)からの受法も記録されている。つまり、小野方においては安祥寺流・勧修寺流・醍醐寺流・醍醐方においては金剛王院流・理性院流を受法したことが分かる。

#### 2. 浄厳房阿闍梨実禅(一一九〇～一二六九)

記録は少ないが、高野山大伝法院の座主で、『伝法院座主補任次第』<sup>70</sup>、醍醐寺文書『大伝法院座主補任次第・大伝法院郭内并本尊等目録』<sup>71</sup>によれば五代座主に仁安元(一一六〇)年に補任されている。

#### 3. 内山真乗房亮慧(恵)(一〇九八～一一八六)

亮慧に関しては『内山永久寺の歴史と美術』<sup>72</sup>に詳しいが、『内山之記』<sup>73</sup>によれば、承徳二(一〇九八)年に誕生し、天承元(一一三一)年に聖賢灌頂を授けられ、文治二(一一八六)年に八九歳で入滅したことが分かる。永久寺開山とされ、『四巻鈔』<sup>74</sup>では淳観(淳寛)の付法の弟子とあり、『血脈類集記』<sup>75</sup>、『野沢血脈集』<sup>76</sup>、『四巻鈔』<sup>77</sup>には、聖賢の付法と記されている。永久寺は興福寺末であるが、亮慧自身は幅広く活動している。

#### 4. 大法房実任(一〇九七～一二六九)

勧修寺の学僧で、勧修寺僧蓮花房良勝(一一二〇)の弟子であることが、『血脈類集記』<sup>78</sup>、『野沢血脈集』<sup>79</sup>等からわか

る。また、仁和寺僧である興教大師覺鑒（一〇九五～一一四三）からも法を受けており、血脈も『四卷鈔』<sup>80</sup>に記されている。勧修寺大僧都嚴覺（一〇五六～一一二二）から法を受け継いでいることが、『野沢血脈集』<sup>81</sup>に見られ、随心院中納言阿闍梨増俊（一〇八三～一一六四）からの相承も『血脈類集記』、『安流伝受紀要』<sup>83</sup>に見られる。晩年は禅林寺に移っている。

5. 摂津僧都（金剛王院僧都）源運（一一二二～一一八〇）

亮慧と同じく聖賢の付法であることが『血脈類集記』<sup>84</sup>、『野沢血脈集』<sup>85</sup>、『諸流灌頂秘藏鈔』<sup>86</sup>等から分かる。保延二（一一三六）年に灌頂を授けられている。なお『野沢大血脈』<sup>87</sup>では源運は亮慧の師となっている。亮慧と密接な関係を持つ醍醐寺金剛院流の学僧と考えられる。亮慧と密接な関係を持つ醍醐寺金剛院流の学僧である。

6. 助阿闍梨観祐（一一五二～一一六三）

観祐は、『血脈類集記』<sup>88</sup>によれば、勧修寺法務寛信の弟子念範の付法の弟子である。観祐については、中野氏は、生没年を天永元（一一一〇）年～承安五（一一七五）年とし、実任ときわめて近い間柄と述べている。『石山寺僧宝伝』<sup>90</sup>によれば、『石山僧都良深により得度し、神護寺七禅師命深・池上律師頼尊・禅林寺光禅・石山寺覚叡阿闍梨・勧修寺淳観・念範に教えを受けた』という。この念範の師である寛信は、勧修寺流祖として有名であり、『血脈類集記』<sup>91</sup>等多くの資料でその名が見られる。本稿では詳細は省略するが、勧修寺別当、勧修寺長吏、東寺長者、東大寺別当を歴任した。

7. 侍従僧都行海（一一〇八前後～一一八〇）

勧修寺慈尊院開祖であり、『血脈類集記』<sup>92</sup>、『野沢血脈集』<sup>93</sup>より、三宝院大僧正定海（一〇七四～一一四九）から教えを受け、寛信からも受法したことが分かる。

8. 醍醐寺座主覚洞院勝賢（一一三八～一一九六）

有名な人物で信西藤原通憲（一一〇六～一一五九）の息であり、廟僧都実運（一一〇五～一一六〇）から灌頂を受けたことが『血脈類集記』<sup>94</sup>、『野沢血脈集』<sup>95</sup>から分かる。東寺二長者・東大寺別当を歴任した。

9. 石山座主公祐（一一三四～一一九六）

## 朗澄について（増山）

石山寺の歴代座主は仁和寺系であるが、公祐も仁和寺僧であり、『血脈類集記』、『石山寺年代記録』<sup>(96)</sup>によれば、嘉応二（一二三〇）年に東寺において、禎喜より寛助―世毫―禎喜―公祐と続く寛助の法脈を受けている。

10. 仁和寺華嚴院景雅（一一〇三―一一八七―一一八九?）

拙稿で詳しく述べたので本稿では詳細は述べないが、景雅は東大寺僧の立場で生涯活動し、華嚴僧である以上に真言僧としての性格が強く、景雅の初期の活動拠点、東大寺別所である光明山寺であり、その後活動の場を、勧修寺、仁和寺等に広げてはいるものの、晩年まで光明山寺においても書写を行っている。

11. 随心院大僧正親嚴（一一五一―一二三六）

随心院に門跡の宣下を得て初代門跡となり、東寺長者、東大寺別当になった人物である。『血脈類集記』、『野沢血脈集』<sup>(100)</sup>、『諸流灌頂秘藏鈔』<sup>(101)</sup>によれば、近江僧都尊念（生没年未詳）から受法しており、また『血脈類集記』<sup>(102)</sup>によれば伯父の権大僧都顯嚴（一一一六―一二八三）より伝法灌頂を受けていることがわかる。

以上から、朗澄の師には、仁和寺や勧修寺、醍醐寺で幅広く活躍する醍醐寺金剛王院流の淳観、亮慧、源運や勧修寺僧である実任、行海がおり、また東大寺僧であり、勧修寺まで活動を広げた景雅がいる。また、石山寺と関係の深い僧としては観祐、公祐がいる。醍醐寺座主勝賢、高野山大伝法院の実禪とも関係を持っている。

次に、『石山寺聖教目録』に掲載されている朗澄の書写・加點・伝持本の中で、書写年代の判明している聖教のうち、「朗澄筆力？」と疑問符のつく書籍を除き、約九〇の聖教を年代順に並べてみると、以下の傾向が見て取れる（紙幅の都合で經典を列挙した一覧表は省略する）。一一五一―一一五四年には勧修寺・金剛峯寺で書写が行われているが、一一五五―一一六〇年頃までは勧修寺のみとなり、一一六〇年からは栗田口での書写活動が見られるようになる。一一六六―一一六九年にかけては石山寺を中心に、勧修寺でも書写活動が行われ、一一七一―一二〇七年の間は、一部に法住寺、蓮華王院、山王院での書写も見られるが、ほぼ石山寺での書写のみとなる。これに関して、築島裕氏は<sup>(103)</sup>「朗澄はもと勧修寺に在り、永万二年の秋の頃から石山寺に移ったらしい」と述べている。

このことから、前半期の朗澄の活動は勸修寺であり、その師の多くも勸修寺と関係を持っている。その点から見なれば、当初の朗澄は、石山寺僧というより勸修寺僧と見たほうが良いであろう。

これを受法の年表と対比させてみると、一一五一年―一一五四年の時期は、淳観、実禅の受法の時期であり、一一五五年以後は亮慧・実任からの受法時期と一致する。一一六〇年以後に栗田口で書写活動が行われるのは実任の栗田口への移動のためと考えられ、一一七一年以後石山寺を中心とした活動となるのは、師である実任が一一六九年に入滅したためであろう。実任と朗澄の接触は亡くなる直前の一一六九年にも見られ、実任は朗澄にとって重要な位置を占める師であったと言えるだろう。

朗澄の使用したヲコト点に注目した築島氏は、「大抵は東大寺点を使用し、時に円堂点を用いた」と指摘している。<sup>105</sup> 月本氏は、朗澄自身が確実にヲコト点を打ったと考えられる書籍について分析した結果、「東大寺三論宗点、円堂点、浄光房点を使用した」と述べている。先に挙げた師僧から伝受されていれば、東大寺三論宗点、円堂点、浄光房点が使われたことに矛盾はない。

石山寺聖教目録に多くの名を残す景雅は、一一六二年頃から勸修寺で活動を始めており、もともと勸修寺で活動していた朗澄とはその時期以降に接触があったのであろう。景雅六十一歳、朗澄三十二歳であり、年齢的にも違和感がない。景雅は、真言僧として活動するだけでなく、華嚴宗長者となった人物でもある。積極的に義天版『高麗大藏經』に接触し、また『三十帖策子』を書写・校合した。このような景雅の学問に対する姿勢が、朗澄に受け継がれたと考えられる。だからこそ、景雅伝領本が石山寺に多数存在するようになったのであろう。弟子朗澄の広範囲にわたる書写・校合の活動が、現在残る多くの聖教に示されているといえる。このことが実任、淳観、観祐、実範、景雅等の聖教を、朗澄が勸修寺から石山寺へもたらすに至った理由ではないかと考えられる。

佐和氏は、『石山寺伝記』の朗澄の項より、「幼時石山で得度した。」と述べている。そのことからすれば石山寺僧とされるべきところであるけれども、築島氏は「もと勸修寺僧」と述べられている。なぜ勸修寺僧とされたのかについて

## 朗澄について（増山）

は、何も明示されておらず、不明であるが、おそらく伝受・書写活動の中心が勧修寺におけるものだからであろう。実任を始めとして師の多くが勧修寺と関係が深く、景雅とのかかわりを考慮すれば、朗澄は勧修寺僧であったと認めるべきであろう。

## 注

- (1) 『石山寺縁起』『大日本仏教全書』第一一七卷一九四頁上
- (2) 佐和隆研「石山寺の歴史と文化財」石山寺文化財総合調査団編『石山寺の研究 一切経編』法蔵館刊、一九七八
- (3) 田中稔「石山寺校倉聖教について」石山寺文化財総合調査団編『石山寺の研究 校倉聖教・古文書編』法蔵館刊、一九八二
- (4) 月本雅幸「朗澄律師と古訓点」石山寺文化財総合調査団編『石山寺の研究 深密蔵聖教編』下「法蔵館刊、一九九二」
- (5) 宇都宮啓吾「院政期訓点資料研究の一問題―真言宗における教務的交流を巡って―」『日本語の研究』四卷一号「二〇〇八年一月」の中で、「朗澄が書写した『千手経述秘』巻上（石山寺の研究 校倉聖教十七箱四四号一）の奥書に「念仏宗朗澄」とある。他にも、運覚が天野山金剛寺一切経蔵『無量清浄平等経覚経』巻下の奥書に「念仏宗運覚」と記述していることから、朗澄・運覚らが居住した醍醐寺・勧修寺・石山寺等において浄土教学が学ばれ、真言僧が自らを「念仏宗（僧）」と名乗る例の存したことが聖教の中から窺われる」と指摘されている。
- (6) 注(3)参照。
- (7) 石山寺文化財総合調査団編『石山寺の研究 校倉聖教・古文書編』三箱四号二三頁
- (8) 注(4)参照。
- (9) 石山寺所蔵の寺誌類については、田中稔「石山寺の寺誌資料について―尊賢撰述の寺誌類を中心として―」石山寺文化財総合調査団編『石山寺の研究 深密蔵聖教編』下「法蔵館刊、一九九二」に詳しい。
- (10) 『石山寺年代記録』上、中、下巻『石山寺の研究 深密蔵聖教編』下 寺誌箱一号「一」～「三」二〇九～二一〇頁・石山寺

## 文化財総合調査団編『石山寺資料叢書』寺誌編第一

- (11) 『石山寺座主伝記』 同一一八箱三号一八〇頁
- (12) 『石山寺僧宝伝』 同一一八箱四号一八〇頁・石山寺文化財総合調査団編『石山寺資料叢書』寺誌編第一
- (13) 『石流相承血脉集』 同一一八箱八号一八一頁
- (14) 注(4)参照。
- (15) 『石山寺年代記録』 卷上 久安六年条 石山寺文化財総合調査団編『石山寺資料叢書』寺誌編第一 三二二頁
- (16) 石山寺文化財総合調査団編『石山寺の研究 校倉聖教・古文書編』十箱七号八三頁
- (17) 『石山寺年代記録』 卷上 永暦元年条 石山寺文化財総合調査団編『石山寺資料叢書』寺誌編第一 三二三頁
- (18) 石山寺文化財総合調査団編『石山寺の研究 深密藏聖教編』上 一一四箱六号「一」～「四」 六四八頁
- (19) 石山寺文化財総合調査団編『石山寺の研究 校倉聖教・古文書編』七箱二三号六三～六四頁
- (20) 『血脉類集記』 六卷 『真言宗全書』三九卷一五二頁下
- (21) 『血脉類集記』 五卷 『真言宗全書』三九卷一九九頁上
- (22) 『野沢血脉集』 二卷 『真言宗全書』三九卷三六二頁下
- (23) 『続伝灯広録』 七卷 『続真言宗全書』三三卷三九八頁上
- (24) 『野沢大血脉』 『続真言宗全書』二五卷五三頁下～五四頁上
- (25) 『野沢血脉集』 二卷 『真言宗全書』三九卷三七三頁下
- (26) 『密宗血脉鈔』 下卷 『続真言宗全書』二五卷三五八頁上
- (27) 『四卷鈔』 中卷 『真言宗全書』三一卷二八三頁上
- (28) 『石山寺年代記録』 卷上 永暦元年条 石山寺文化財総合調査団編『石山寺資料叢書』寺誌編第一 三二三頁
- (29) 『石山寺年代記録』 卷上 応保元年条 同右三二三頁
- (30) 石山寺文化財総合調査団編『石山寺の研究 校倉聖教・古文書編』一六箱二五号一六一頁
- (31) 『石山寺年代記録』 卷上 仁安二年条 石山寺文化財総合調査団編『石山寺資料叢書』寺誌編第一 三二三頁



## 朗澄について（増山）

- (32) 『石山寺年代記録』巻上 仁安三年条 同右三二四頁
- (33) 『血脈類集記』五卷 『真言宗全書』三九卷一三八頁下
- (34) 『野沢血脈集』一卷 『真言宗全書』三九卷三五三頁下
- (35) 『伝灯広録』後巻第二 『続真言宗全書』三三卷四九四頁上
- (36) 『真言附法本朝血脈』 『続真言宗全書』二五卷十三頁下
- (37) 醍醐寺蔵本 『伝法灌頂師資相承血脈』 築島裕 「醍醐寺蔵本「伝法灌頂師資相承血脈」『醍醐寺文化財研究所研究紀要』第一号九三頁上「一九七八」
- (38) 『四卷鈔』中巻 『真言宗全書』三一巻二七三頁上
- (39) 同右二七七頁下
- (40) 『石流相承血脈』は翻刻されておらず、月本雅幸氏「朗澄律師と古訓点」より引用した。また、勸修寺流の支流である石山流静養方の法脈を『密教大辞典』より追加した。  
真頼（九四一）は、苦米地誠一氏（『平安期真言密教の研究』ノンブル社刊、二〇〇八）によれば、「石山寺内供奉十禅師淳祐（八九〇～九五三）より真言の法を受け、三密に明かであり、三時の念誦を一時も休まない。」と述べており、石山流人師方は石山流相承の血脈であって、勸修寺流の相承血脈ではないであろう。
- (41) 醍醐寺蔵本 『伝法灌頂師資相承血脈』 築島裕 「醍醐寺蔵本「伝法灌頂師資相承血脈」『醍醐寺文化財研究所紀要』第一号八二～八三頁
- (42) 中野玄三 『続日本仏教美術史研究』思文閣出版、二〇〇六
- (43) 浜田隆編「図像」『日本の美術』第五五巻「至文堂、一九七〇」
- (44) 石山寺文化財総合調査団編『石山寺の研究 校倉聖教・古文書編』校倉聖教附箱三七号四六三～四六四頁
- (45) 『血脈類集記』五巻 『真言宗全書』三九卷一一九頁上
- (46) 『血脈類集記』四巻 『真言宗全書』三九卷一一三頁下
- (47) 『血脈類集記』五巻 『真言宗全書』三九卷一三三頁上

- (48) 『伝灯広録』後二卷 『続真言宗全書』三三卷五〇三頁上
- (49) 『血脈類集記』五卷 『真言宗全書』三九卷一一九頁上
- (50) 『野沢血脈集』二卷 『真言宗全書』三九卷三九九頁上
- (51) 『石山寺年代記録』巻上 治承二年条 石山寺文化財総合調査団編『石山寺資料叢書』寺誌編第一 三二五頁
- (52) 景雅の詳細については、拙稿「景雅について」(『仏教文化学会紀要』第二一号)に記載。  
前稿では触れなかったが、武内孝善「後七日御修法交名総覧(一)」、『高野山大学論叢』第二一卷一〇一～一〇二頁によれば、景雅は後七日御修法に行海が大阿闍梨を勤めた承安三(一一七三)年、承安三(一一七五)年、治承三(一一七九)年の三回全てに出仕していることから、行海と関係があったと思われる。
- (53) 『三寶院伝法灌頂私記』 『続群書類従』二六輯上四五七頁下
- (54) 『石山寺年代記録』巻上 文治三年条 石山寺文化財総合調査団編『石山寺資料叢書』寺誌編第一 三二五頁
- (55) 『血脈類集記』五卷裏書 『真言宗全書』三九卷一二〇頁上
- (56) 注(3)参照。
- (57) 『諸流灌頂秘藏鈔』『石山流／印信』 『真言宗全書』二七卷三四四頁上
- (58) 注(3)参照。
- (59) 『血脈鈔・野』 『続真言宗全書』二五卷九三頁上
- (60) 醍醐寺蔵本『伝法灌頂師資相承血脈』 築島裕「醍醐寺蔵本「伝法灌頂師資相承血脈」『醍醐寺文化財研究所研究紀要』第一号一〇三頁「一九七八」
- (61) 注(4)参照。
- (62) 『石流相承血脈集』 『石山寺の研究 深密蔵聖教編』下 一一八箱八号一八一頁
- (63) 『石山寺僧宝伝』 石山寺文化財総合調査団編『石山寺資料叢書』寺誌編第一 甲本四七二頁、乙本四九六頁
- (64) 『血脈類集記』四卷 『真言宗全書』三九卷一一二頁下
- (65) 『血脈類集記』四卷 『真言宗全書』三九卷一一一頁下

## 朗澄について (増山)

- (66) 『野沢血脉集』二卷 『真言宗全書』三九卷三六一頁上
- (67) 『野沢血脉集』一卷 『真言宗全書』三九卷三五三頁下
- (68) 『諸流灌頂秘藏鈔』 『真言宗全書』二七卷三四一頁下・三四八頁上
- (69) 『四卷鈔』上 『真言宗全書』三一卷二五一頁上・『四卷鈔』中 『真言宗全書』三一卷二八三頁上
- (70) 『伝法院座主補任次第』 『続群書類従』四輯下五四七頁下
- (71) 「大伝法院座主補任次第」 坂本正仁「醍醐寺所藏大伝法院関係諸職の補任次第について―紹介と翻刻―」『豊山教学大会紀要』一六号「一九八八」
- (72) 東京国立博物館編『内山永久寺の歴史と美術』(資料編)・(研究編)「東京美術、一九九四」
- (73) 同右四六頁
- (74) 『四卷鈔』上 『真言宗全書』三一卷二五一頁上・『四卷鈔』中 『真言宗全書』三一卷二八三頁上
- (75) 『血脉類集記』四卷 『真言宗全書』三九卷一一二頁下
- (76) 『野沢血脉集』二卷 『真言宗全書』三九卷三六二頁下
- (77) 『四卷鈔』下 『真言宗全書』三一卷三一四頁下
- (78) 『血脉類集記』五卷 『真言宗全書』三九卷一二〇頁下
- (79) 『野沢血脉集』一卷 『真言宗全書』三九卷三五三頁下
- (80) 『四卷鈔』上 『真言宗全書』三一卷二三〇頁下・二三五頁上
- (81) 『野沢血脉集』二卷 『真言宗全書』三九卷三九八頁下
- (82) 『血脉類集記』四卷 『真言宗全書』三九卷九三頁下
- (83) 『安流伝授紀要』十卷 『真言宗全書』三四卷四三七頁下
- (84) 『血脉類集記』四卷 『真言宗全書』三九卷一一二頁下
- (85) 『野沢血脉集』二卷 『真言宗全書』三九卷三六二頁下
- (86) 『諸流灌頂秘藏鈔』 『真言宗全書』二七卷三二六頁下

- (87) 『野沢大血脈』 『続真言宗全書』 二五卷五三頁下～五四頁上
- (88) 『血脈類集記』 五卷 『真言宗全書』 三九卷一三三頁上
- (89) 中野玄三『続日本美術史研究』[同朋舎、二〇〇六]によれば、『高山寺経蔵典籍目録』の『五秘密』(第四部第一二四箱十七)の奥書に「承安五年六十六才入滅」とあることから、生没年を一一一〇～一一七五としているが、ここに見える「亮阿闍梨」が、その他に見られる「助阿闍梨観祐」と同一であるか否か不明である。そのため、必ずしも中野氏の推定に関しては確実と言えない。

- (90) 『石山寺僧宝伝』 石山寺文化財総合調査団編 『石山寺資料叢書』 寺誌編第一 甲本四七一～四七二頁、乙本四九五～四九六頁

- (91) 『血脈類集記』 四卷 『真言宗全書』 三九卷一一八頁下～一一九頁上
- (92) 『血脈類集記』 四卷 『真言宗全書』 三九卷一一三頁下・『血脈類集記』 五卷 同三九卷一一八頁下～一一九頁上
- (93) 『野沢血脈集』 二卷 『真言宗全書』 三九卷三六五頁下～三六七頁上・三九八頁下～三九九頁上
- (94) 『血脈類集記』 六卷 『真言宗全書』 三九卷一五七頁上
- (95) 『野沢血脈集』 二卷 『真言宗全書』 三九卷三七一頁上
- (96) 『血脈類集記』 六卷 『真言宗全書』 三九卷一五〇頁上
- (97) 『石山寺年代記録』 卷上 嘉応二年条 石山寺文化財総合調査団編 『石山寺資料叢書』 寺誌編第一 三二五頁
- (98) 景雅の詳細については、拙稿「景雅について」(『仏教文化学会紀要』第二一号)に記載。
- (99) 『血脈類集記』 五卷 『真言宗全書』 三九卷一三三頁下・『血脈類集記』 七卷 同一七七頁上～下
- (100) 『野沢血脈集』 一卷 『真言宗全書』 三九卷二五三頁下
- (101) 『諸流灌頂秘蔵鈔』 『真言宗全書』 二七卷三四八頁上
- (102) 『血脈類集記』 六卷 『真言宗全書』 三九卷一五九頁下
- (103) 築島裕「石山寺経蔵古訓点本統考」 石山寺文化財総合調査団編 『石山寺の研究 校倉聖教編』[法蔵館刊、一九八二]
- (104) 築島裕「石山寺深密蔵の古点本について」 石山寺文化財総合調査団編 『石山寺の研究 深密蔵聖教編上』[法蔵館刊、一

朗澄について（増山）

九九二

(105) 注(4) 参照。

(106) 注(2) 参照。

(107) 注(104) 参照。

〈キーワード〉文泉房朗澄、石山寺、勸修寺